

全釋淵氏物語

卷四



松尾

取

松尾 聰

全釋源氏物語

卷四



筑摩書房版

全釈 源氏物語 卷四

須磨・明石

定価 一、六〇〇円

昭和三十六年八月三十日初版第一刷発行
昭和四十二年八月二十日初版第二刷発行

著者 松尾 總

発行者 竹之内 静雄

印刷者 多田 基

發行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京 〇七六五一（代表）
振替 東京 四一一二三

凡 例

卷一のはじめに付けた凡例のなから、この巻にも関係のある事柄をえらび、さらに新しく一、二補うべきことを加えて、次にかゝげることとする。

一、本書は「本文」と「口訳」と「注」とから成っている。「本文」を下段に置き、その本文に当る「口訳」を上段に掲げ、口訳だけでは説明に欠けるとあると思われる語や句については、本文中のそれらの部分の右肩に漢数字の番号を付し、本文のあとにその番号を頭において、それらの「注」を施した。「口訳」のなかで、歌はすべて（二字下げに組んで）散文訳だけをかゝげたから、下段本文中の原歌を参照されたい。

一、本文は池田亀鑑博士の「源氏物語大成校異篇」の底本に拠った。源氏物語の伝本には本文のはし／＼において若干の異同があり、現在のところ、伝本は、その本文によっていわゆる青表紙本・河内本・別本に三大別されているのであるが、なかで、青表紙本が最も原形に近いものと考えられている。青表紙本は藤原定家が家の本とした一証本であって、「花散里・柏木・早蕨」の三帖は定家自筆の原本が現存しているが、他は散佚（さんいつ）してしまって、その忠実な伝写本も、完全に近い帖数を保有しているものは極めて稀（まれ）で、大島雅太郎氏蔵吉見正頼旧蔵飛鳥井雅康自筆本

をもって随一とするといわれる。この本は、大内政弘が、貴重すべき青表紙証本を当時の名筆であった権中納言飛鳥井雅康（永正六年〔一五〇九〕十月没）に依頼して、複本作成の意味で忠実に写さしめたものと推定されているが、現在では、第一帖桐壺・第五十四帖夢浮橋の両帖は別筆であり、浮舟の一帖はこれを欠く。このうち浮舟の欠帖は恐らく偶然的脱落であろう。又、桐壺・夢浮橋の両帖は、もと雅康自筆の両帖を、正頼が家本を重からしめようとて、聖護院道増（近衛尚通の子種家の弟）・道澄（種家の子）に書写を依頼して、その成れるものを以って雅康自筆の両帖と入れかえたものと判定される。こんなわけで、雅康自筆本だけをもってたゞちに底本とはなしがたいので、池田博士は、花散里・柏木・早蕨の三帖は現存の定家本を用い、桐壺・夢浮橋の二帖、および浮舟には雅康自筆本に次ぐべき地位をもつという池田博士本（伝藤原行能等各筆）を採り、又、初音は雅康自筆本が別本系統の本文を伝えているために、同じく池田博士本を用いて底本としている。但しその他の帖々は、すべて雅康自筆本が底本である。

一、大成底本本文を本書の本文として採用するに当っては、句読点を施し、段落を立て、仮名には適宜漢字を宛て、仮名づかいを正し、会話の部分（ときには心中語の部分にも）には「かぎ」を施して、読みやすいようにした。なお原本本文に「御」をあててある語は、少なくともあるものについては「おほん」と読むべきかとも思われるが、通説に従って、「御とき」を「おほんとき」と読むのは、すべて「おん」と読んでおいた。但し「御らん」については「ごらん」と読むべきであろう。なお「おまへ・おもと・おまし・おもひ」などに限って「御」にあたるものが「お」と仮名書きされることがあるが、「お」につづく語が「マ行」にはじまるものであることから見れば、これらもそれ／＼「おんまへ・おんもと・おんまし」と読まるべきものかもしれない。これら原本本文に仮名書きされ

ている「お」は、本書の本文でも仮名で示した。原本文に漢字をあててある動詞に送り仮名が添えられていない場合は、ふつうの読みに従い、音便で読むべきかとも思われる「思たまへましかは」なども「思ひ。たまへましかば」と「ひ」を送って読んでおいた。

一、本書の本文は一切改めないことをもって原則としたが、稀に明らかに誤りと認められるものについては、仮りにこれを改めて、その旨を「注」に記した。また誤りかと疑われるものについては、その旨を「注」に記すと共に、できるだけ他本の異文を「注」に掲げた。

一、口訳は、いちじるしい不自然感を覚えさせない限りにおいては、逐語直訳を旨とし、みだりに説明のことばを補わないで、原作のおもかげを保持することにとめた。

一、口訳にあたって、現在会話には用いない「である」体を避けて、会話に用いる「ます」体採ったのは、当時の物語は、作者が自ら話して聞かせる代りに書きつづったもので、従って読者は（作者に代って）声に出して他人又は自らに読み聞かせたものと考えられるからである。

一、普通の注釈書では、本文中の会話には、話者の主体を示す人名の略号を付記し、又、口訳文中には、できるだけ主語を補って、読みやすくすることにとめているが、ともすれば原作の味をそこなうことが多いのを考慮して、本書では、本文においては一切そのことを廃し、口訳文においては、誤られやすい場合をのぞいて、できるだけそれを控えた。

一、口訳は現代仮名づかい・当用漢字に従うようにとめた。口訳文の中の「御」は、振仮名を施さない場合は、すべて「い」と読みたい。

一、注は、一般読者が本文理解に必要と思われる範囲内において、なるべくくわしく施すようにつとめた。一冊のなかで、同じ言葉に対する同じ注をくりかえしていることがあるが、読者の便を慮ったためである。

一、古来異説のあるものについては、一理ありと判断される限りは、なるべく諸説を注記するように心がけたが、次項にのべるような事情のほかに、紙幅の都合もあって、必ずしもすべてを尽くしているわけではない。

一、諸説は、広汎かつ精細・正確な研究的な調査を完了した上で、これをおか、けるべきであったが、そうしたことは、資料的にも、時間的にも、今の私には到底できないので、その説が誰によつてはじめて提唱され、誰によつて支持され、あるいは批判されたというようなことには、あまり重きをおかないで、たゞ私が見つけた範囲での諸説そのものの内容——それも多くは現代諸家の諸説について——を主として、簡単に並べあげることにした。従つて、当然か、けるべき卓説なり芳名なりを落して、諸家に対して礼を失していることも多いかと思われる。御寛恕を願いたい。

一、この巻の口訳および注を施すにあたっては、藤原伊行の「源氏釈」、四辻善成の「河海抄」、一条兼良の「花鳥余情」、三条西実枝の「明星抄」、中院通勝の「岷江入楚」、北村季吟の「湖月抄」、契沖の「源註拾遺」、賀茂真淵の「源氏物語新釈」、本居宣長の「源氏物語玉の小櫛」、宮田和一郎氏の「頭註対訳源氏物語」、金子元臣氏の「定本源氏物語新解」、吉沢義則博士の「対校源氏物語新釈」「源語釈泉」、佐伯梅友博士の「源氏物語新抄」、池田亀鑑博士の「日本古典全書源氏物語」、山岸徳平氏の「日本古典文学大系源氏物語」、北山谿太氏の「源氏物語の語法」「源氏物語のことばと語法」「源氏物語辞典」、谷崎潤一郎氏の「新訳源氏物語」、佐成謙太郎氏の「対訳源氏物語」、五十嵐力博士の「昭和完訳源氏物語」などの学恩を被ることが甚大であつた。記して謝し奉る。なおこれらの諸書

は、河海抄・花鳥余情などについては間々学習院大学蔵写本などを参考したが、その他はすべて現行の活字本によった。(明星抄は、国文注釈全書に「細流抄」として収録されているものが、それであるといわれるので、それを用いた。)又、それらの諸書に引用されている書(たとえば弄花抄)は、手許に確かめるべき資料がない場合は、そのまゝ孫引きしたことが多い。他日、吟味されなければならない。

一、諸注釈書の探索・整理、その他について常磐井和子氏の多大なる援助を得た。氏の厚情には深く感銘している。一、読みさして、再び読みつづけるときの便宜を考えて、各帖のはじめに、その帖の梗概こうがいと略系図をかゝげた。従って、はじめから読みつづけられる読者においては、梗概は、むしろその帖を読み終えられたのちに、目を通されることを希望する。

珊瑚秘抄

弘徽殿

親のいふと靖後

出の親親中大内膳

名と書より平

庫平弘徽と湯に似た

後出の寛平等三代

の母に上見より此且香

と假て今も事知漢唱

也鳥羽殿と十羽書

或は山法と火舎法

うすうすうすうす
うすうす

杜持城頭風定雲雲也

注曰雲雲名右宮内卿兼法度

事也不明也

朱桂院いふより

前より一より老源

氏尾連なり

蓮生

わけ

日本紀曰上休年小児年

往日貞治始依故齋蓬流

贈及后家貴令令撰献

河海抄其卷是撰保仍

法師兼寂陰園末寺郭

大王と下同撰進紫明抄

例也其物語先達注釋甚

多詳略於此抄表究諸

流所涉猶也至面交口決

し秘説を自右の右平末

至毫端而今思生後し廢

志竊録此一卷名珊瑚秘抄

恒乃何ゆし則依し故也海屋

生珊瑚し故也同才し中

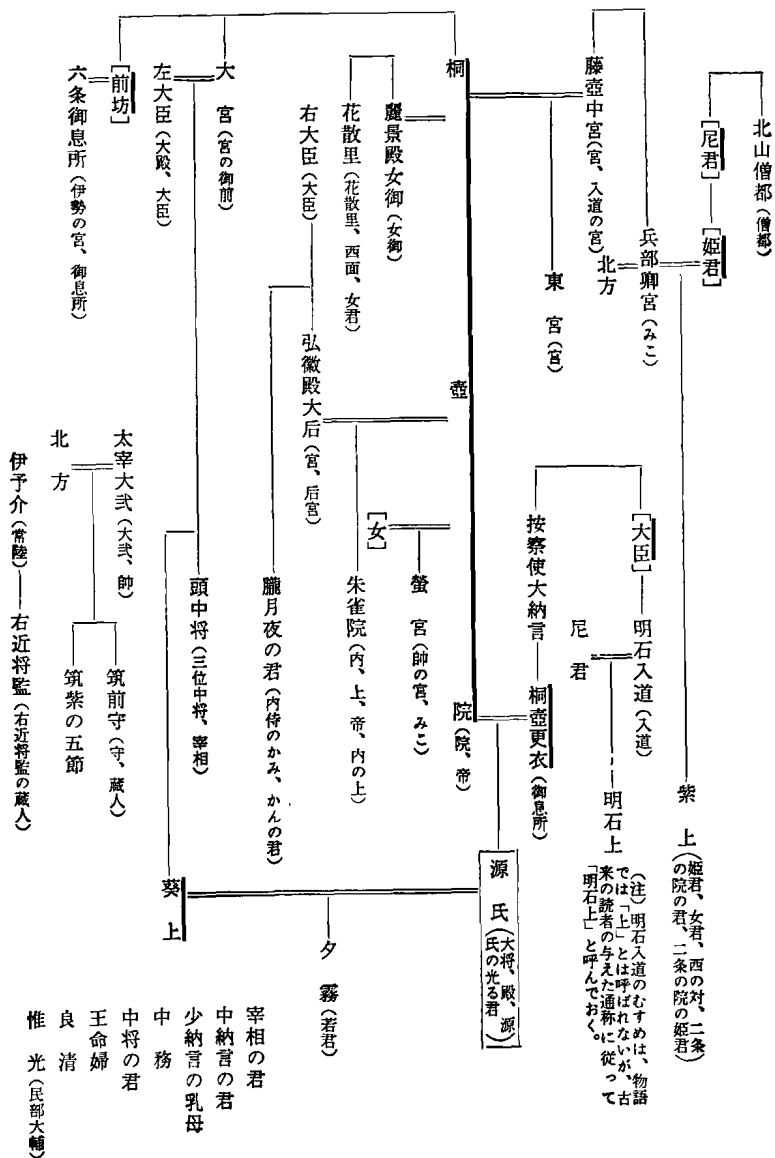
四辻善成著。源氏物語の注釈。河海抄に「秘説あり」として注を省いてあるものにあたる。

須

磨

す

ま



世の中の情勢が思わしくなくなってきたので、源氏は京を離れて須磨へ退く決意をしたが、紫上への愛着の心は深い。花散里をはじめ源氏の離京に傷心する女性が多かった。藤壺からも忍びのおたよりが度々ある。昔これほどの情をみせて下さったらとつらい思いであった。三月廿日あまり、京を離れることになった。その二三日前、まず左大臣の邸を訪ねて、亡妻葵上との間の若君、左大臣、三位中将（もとの頭中将）などと別れを惜しみ、翌朝二条院に行ってみると、昔に変わってさびれた有様が今更身にしみて、世の憂さが思い知られる。紫上は、父親王が世間に気がねして、源氏の見まいにさえ来ないのを人目恥かしく思っている。紫上には、もし須磨に長年を経るのなら、殿の中にも迎えようとなくさめのことを与えたりした。花散里の女御姉妹を訪ね、臘月夜には手紙で暇乞いをする。出発の前夜には、父帝の御陵に参拝したが、その途次、藤壺を訪問、藤壺は御座所ちかい御簾の前に源氏の座を設けて、自身で話された。御陵から帰って、東宮にお別れの消息を奉る。当日は、紫上とゆつくり話をして暮らして、夜ふけに出発。海路無事須磨に着いた。住いは行平中納言がいた家の近くであった。ようやく落ちついた梅雨のころ、京に使を出して、紫上、藤壺、臘月夜などあちこちに手紙を送った。それ／＼返事がある。かねて伊勢の六条御息所へも使を出したが、わざ／＼返書をもって使が来た。花散里の心細げな返事をみて、源氏は、京の家司に命じて邸の修理をさせたりした。臘月夜は罪を許されて、七月に参内した。帝は寵愛なざるものの、その流す涙を「誰のために落ちるのか」とお疑いであった。秋八月十五夜に、源氏は、月の顔ばかりが見つめられて、殿上の遊宴が恋しく、「恩賜の御衣は今こゝにあり」と誦じた。その頃、大貳が上京の途中、こゝを通るので、娘の五節は船の中から源氏に消息をよこした。

都では、月日が過ぎるまゝに、帝をはじめ源氏を恋しく思う人が多いが、弘徽殿がとやかく言うので、憚って文通する人もなくなってしまう。源氏は、紫上を迎え取りたいが、こらえている。冬、雪の降り荒れる日に、琴をひいて、心をなぐさめたりした。須磨に程近い明石では、明石入道がその娘を源氏にさし上げたいというので一生懸命になっている。入道の娘には良清が手紙を送ったのだが、娘は返事もしなかった。父の入道は良清に対面を申入れたが、良清は行かない。翌年の春、今は参議になっている三位中将が、わざ／＼訪ねて来た。二人は月頃の物語を泣きつつ笑いつする。三月上巳の日、すゝめられて源氏は陰陽師を呼んではらえをすると、にわかに大雷雨となる。その夜、源氏の夢に、えたいの知れない者が「宮からお召しがあるのに、なぜ参上なさらないのか」といって源氏をさがし歩く。目がさめて、海の竜王にみ入られたのだと気味がわるくて、この住いが堪えがたいように思われた。

世の中がたいへん面倒で、ぐあいの悪い事ばかりが、ふえるので、源氏の君は、「強いて知らぬ顔をして過ごしていたところで、ひょっとしたらこれ以上ひどい事が……。」と思うようにおなりになってしまいます。「あの須磨は、昔こそ人の住みかなどもあったのだが、今は、ひどく人里離れて荒涼としていて、漁師の家さえ稀で……。」などとお聞きになりますけれど、人の出入りが多くしまりのないすまいは、きつととても行ったかいのない気がするでしょう。そうかといって都を遠ざかるなら、それも、ふるさとが気がかりにちがいなからう事を、みつももないほどに思い乱れていらっしやいます。よろずの事を、過去未来につけてお思いつゞけになりますと、悲しい事はとてもいろいろなのです。つらいものとして思い捨ててしまっている世の中も、今は限りと離れてしまおうとすることをお思いになるにつけては、たいへん捨てかねる事がたくさんある中でも、姫君が日ごとの明け暮れにともなっては、思い歎いていらっしやる様子がお気の毒で、しみ／＼心に感じられるのですが、別れて後に

世の中いとわづらはしく、はしたなき事のみまされば、せめて知らず顔にあり経ても、これよりまさる事もやと思しなりぬ。かの須磨は、昔こそ人のすみかなどもありけれ、今は、いと里離れ心すごく、海士の家だにまれに、など聞き給へど、人繁くひた、けたらむすまひは、いと本意なかるべし、さりとて都を遠ざからむも、故里おぼつかなかるべきを、人わるくぞ思し乱る。よろづの事、来し方行く末思ひ続け給ふに、悲しき事いとさま／＼なり。憂きものと思ひすてつる世も、今はと住み離れなむ事を思すには、いと捨て難きこと多かるなにも、姫君の明け暮れにそへては思ひ歎き給へるさまの心苦しうあはれるを、行きめぐりて

も、まわりまわってやはり又会い見るような事を必ず果そうとお思
いになるとしたところで、それでさえ、やはり一日二日のあいだ別
れ別れに明し暮らす折々でさえも、気がかりなものに感じられ、女
君も心細いようにばかりお思ひになつていらつしやるのに、幾年こ
れこれの間と期限がきまつている旅でもなく、たゞ「再び逢うとき
を期限として」隔たつて行くのなら、それも、定めないこの世で、
そのまま永の別れとなるべき門出でもあらうか、とひどく悲しく感
じられなさいますので、「こつそりと一緒につれて行こうか。」と、
お思ひつきになる折もありますけれど、そんなたよりなさそうな海
辺の、波風よりほかに立ちまじつてたずねる人もなからうと思う所
に、こんなに可憐なおすがたで連れておいでになつてゐるなら、そ
れも、ひどく不似合で、自分の心にもかえつて物思ひの種であるに
ちがひなからう、などと、お考え直しになりますのを、女君は、
「どんなにつらい旅路にでも、あとにのこされ申し上げなくてさ
えいられるのでしたら。」

もまた逢ひ見む事を必ずと思さむにて
だに、なほ一二日の程、よそくに明
かし暮らす折々に、おぼつかなきも
のに覚え、女君も心細うのみ思ひ給へ
るを、幾年その程と限りある道にもあ
らず、逢ふを限りに隔たり行かむも、
定めなき世に、やがて別るべき門出に
もや、といみじう覚え給へば、忍びて
もろともにもや、と思し寄る折あれど、
さる心細からむ海づらの、波風より外
に立ち交る人もなからむに、かくらう
たき御さまにて、引き具し給へらむも
いとつきなく、わが心にもなかく物
思ひのつまなるべきを、など思ひ返す
を、女君は、
「いみじからむ道にも、おくれ聞えず
だにあらば。」

と自分の思わくに引き向けて、君を恨めしく思っておいでの様子で
とおもむけて、うらめしげに思おもいたり。
す。

(一) 世の中いとわづらはしく云々 賢木巻あたりから、左大臣方の政治権力は次第に失墜し、右大臣、弘徽殿女御方が優位を占め始め、源氏自身も右大臣の娘の朧月夜尚侍との秘密が発覚した上に、弘徽殿方からは、源氏が帝の退位をのぞみ東宮の即位を早める策動をしていると邪推されようとするなど、源氏の政治的立場を危くする事態が重なってきている事が書かれていたが、それらを指す。(二) はしたなき 中途半ばだ・どっちつかずだ、の意から、「まがわるい・ぐあいがわるい」の意に用いられる。(三) せめて 強いて。無理にも。(四) あり経ても 「ても」は接統助詞の「て」に、助詞の「も」の添ったもの。「も」を感動の意にとれば、「(都に) このまゝすごしていつまでまあ」の意。「も」を並列の意にとれば、「せめて知らず顔にあり経ず、更に積極的に右大臣方の気にさわるような事をする場合」と「せめて知らず顔にあり経る場合」とを並べて、前者を省略して後者にだけ「も」を添えた言い方とみる。たゞし並列の場合でも、「ても」の上にくる動詞のあらわす動作が現実に行なわれそうもないことをあらわす場合は、大ていの場合、仮定の「とも」と同じような意になり、「……したところで」と訳すと当るようである。こゝもそれとみておく。なお後の「天の下をさかさまになしても」(一九ページ)の注参照。(五) これよりまさる事もやと「事もや」の下に「あらむ」などの省略がある。「これ」は源氏が政治から遠ざかり自邸に引きこもっていなければならない事や、司つかさど石に昇進のない事などを指すのであろう。「これよりまさる事」は、ふつう遠流を意味するとされている。(六) かの須磨は源氏を須磨に移すのは、在原行平中納言が「事に当りて」須磨に籠った故事(古今、雑下)や、更に菅原道真の左遷、源高明・藤原伊周の流罪、周公旦が讒にあって、難を避けて自ら東に行った故事(史記・尚書・詩経などにみえている)などに拠っているといわれている。明星抄は「凡此巻は、行平を本としてかけり。其謂は行平は吾と蟄居したる也。今源も我と籠居あるべしと也。よく行平の事に叶へり」といい、花鳥余情は「さかきの巻に文王の子武王の弟と源氏の自称せしは、周公旦におのれをなずらへたる証拠也」という。(七) 人のすみか 金子元臣氏、池田氏、佐成氏は「身分ある人の別荘」とされる。(八) 心すこくて「心すこし」は、心にぞつとするような物さびしさを感じる状態であること。(九) ひた、けたらむすまひ 「ひたゝく」(下二段)

はよくわからない。類聚名義抄では「沌、浜、浪、浸、雷同」を、字鏡集では「沘、混」、色葉字類抄では「濫」などを「ヒタ、ク」と訓んでいる。源氏物語の中には他に一例、若菜上巻「これをぞおいらかなる人と言ふべかりけるとなむ思ひ侍る。よしとて又あまりひたたけてたのもしげなきもいとくちをしやとばかりのたまふに」しかない。他には、紫式部日記「などか必ずしも面憎く、ひき入りたらんがかしこからむ。又などてひたたけてさまよひさしいづべきぞ」などの用例が見える。花鳥余情に「人しげくかまびすしき心なり。」玉の小櫛に「俗言に、とりしまりなく、ばつとしたるといふ事なり。」と言ひ、最近の注釈書も大体これらに従って吉沢氏は「乱雑な」、池田氏は「賑かで開放的な」、佐成氏は「ばつとしたあらわな」、谷崎氏は「賑かな」、山岸氏は「賑かで、開け放しのあらわなような」と訳しておられる。前掲の漢和辞書や用例から見ても「しまりが無い・乱雑だ」などといったような訳語があたりそうであるから、一往そう訳しておく。(二〇) 故里おぼつかなくなるべきを「故里」は、他にうつり住んだものが、もと住みなれた所をさしている。こゝでは源氏自身の家をさしているが、源氏の関係のある京の女性たちをひろくふくめているとみるべきであらう。「おぼつかなし」は、不安だ・きがかりだ、の意。(二一) 人わるく「人わるし」は、体裁が悪い・みっともない、の意。(二二) 住み離れなむ「住み離る」は常の住む所をはなれる、又は世をはなれる、の意といわれているので、一往従っておくが、「離る」を下におく複合動詞は「出で離る・いとひ離る・行き離る・漕ぎ離る・立ち離る・そむき離る」など、いずれも「離る」と上の動詞のあらわす動作と協調的 simultaneous である点、「住み離る」では異例であつてやゝ疑わしい。あるいは「澄み離る」(心の煩いをすて心を澄まして離れる)かとも思われるが、用例をみると、やはり「すみ」は「住み」であるらしいから、「離れて住む」と解くのがむしろ穏当か。なお考えたい。(二三) 姫君 紫上。式部卿の宮の姫君で、幼時から源氏に引き取られている。「姫君」と呼ばれているとはいえ、数え年十八歳位で、すでに源氏とは夫婦の間柄である。すぐあとで「女君」とよばれているのは、男に対する女として、男から意識されているきもちがつよそうな場合に、作者が使い分けているのである。(二四) 行きめぐりても 古今、離別、道にあへりける人の車に、物をいひつきて、別れける所にてよめる、友則「下の帯の道はかたがた別るとも行きめぐりても逢はむとぞ思ふ」(上衣の下締の帯をすると、はじめは端の方が両方へ別れるが、まわしてむすぶと又出合うものである、そのように今行く道は、こう右と左へ別れてゆくとしても、又そのうち行きめぐってあなたと会おうと思います、の意)を引いたものといわれる。しかし引歌は必ずしも必要ではないかも知れない。(二五) なほ一二日の程 雲林院に源氏が参籠したとき、紫上と互に離れ居を悲しんだことが、賢木巻に見えている。「一二日」は「ひと